RI 第 2640 地区職業奉仕委員会

『職業奉仕とは何か』

(職業奉仕の危機)

２００７～０８年度クラブ委員長会議報告

RI 第 2640 地区職業奉仕委員会	**PG カウンセラー**	**平尾 寧章**
	委員長	**角谷 浩二**
	副委員長	**丸山 信二**
	委 員	**杉本 昌史**
	委 員	**近藤 徳雄**

RI 第２６４０地区職業奉仕委員会
委員長　　角谷　浩二(泉南ＲＣ)

はじめに

私と職業奉仕との出会いは、今から３年前にさかのぼります。前地区委員長の桃田隆彦様から地区委員にお誘いを受け、ほんの軽い気持ちでお引き受けしたのが始まりです。その時は桃田前委員長の横で黙って座っていればいいだろうという軽い気持ちでいたのが、「ロータリーボランティアを担当し、会議で１５分程度その話しをしてくれ。」と言われて驚愕いたしました。その当時、私は全く職業奉仕の知識がなく、理解しようとも思っておりませんでした。そこで何か良い資料がないか、参考書がないか探しましたがなかなか見つかりません。手続要覧を見ても全く分かりません。探しあぐねておりましたら、桃田前委員長より１冊の本を手渡されました。２６８０地区で作られました「ロータリー学入門」という小冊子です。ここで初めて深川純一 PG と出会うことができました。ロータリーに入会し初めてロータリーの思想に触れさせていただきました。まさしく「目から鱗が落ちる」とはこのことを言うのだと感嘆いたしました。

桃田前委員長から地区職業奉仕の委員長を引き継ぎ、今年で２年目になります。私の地区委員長の使命は「ロータリー学入門」で学んだ深川先生の職業奉仕の考え(深川理論)をいかに正確に、解りやすくロータリアンに伝えるかであります。私は深川先生とは一面識もありませんし、直接ご指導を受けたこともありません。それゆえ、私の話にもし間違いがありましたら、ひとえに私の勉強不足のなせる業でありましてご容赦いただきたく存じます。何はともあれ、この小冊子がロータリーの理解に少しでもお役に立てれば幸甚に思っております。尚、２６８０地区の職業奉仕委員会が作られた田中毅 PG 講演記録「職業奉仕の重要性と未来展望」も参考資料に使わせていただいております。

「職業奉仕とは何か」

(職業奉仕の危機)

目　次

「職業奉仕とは何か」（職業奉仕の危機）-----委員長　　角谷浩二----------？

「私のロータリー」----------副委員長　丸山信仁----------？

「４つのテスト」----------委　員　　杉本昌史----------？

「ロータリー綱領」----------委　員　　近藤徳雄----------？

「ＰＤＧカウンセラー総評」----------ＰＤＧ　　平尾寧章----------？

『職業奉仕とは何か』

(職業奉仕の危機)

RI 第２６４０地区職業奉仕委員会
委員長　　角谷　浩二(泉南ＲＣ)

私は本年度の地区職業奉仕委員会の年度テーマを『職業奉仕とは何か』(職業奉仕の危機) とさせていただきます。何故このようなサブテーマにしたのか。それは、ロータリーの基礎的な理念である職業奉仕を全く理解していないロータリアンが増えてきたことにあります。単に社会奉仕さえすれば良い、お金や物で奉仕すれば良いという考えを持たれているロータリアンが多くなってきたことにあります。ボランティア活動をしたければ、それを専門に扱っている組織に入ればいいのであって、ロータリーに入った意義がありません。他の奉仕団体にない特徴が、ロータリーの職業奉仕ならば、それを理解しなければロータリアンとは言えないのではないでしょうか。

職業奉仕はロータリーの精神、哲学そのものであり、この教えに基づいて活動するのがロータリーであります。まず、職業奉仕を理解するには「ロータリー運動は倫理運動である。」ということを理解しなければなりません。ロータリー運動が倫理運動であるがために古来よりいろいろな原理原則が生まれてきたようであります。その中でもこれがロータリーだと言われるのが「職業奉仕」であります。「ロータリーのロータリーたる所以は職業奉仕の実践にあり。」と言われております。

このように説明しますと職業奉仕は難しいものだという先入観が先に立ち、頭の中で拒否反応を示してしまいます。確かに難解な部分もありますが、私はできるだけ単純明快に説明したいと思っております。

「ロータリー運動は倫理運動である」と言いましたが、まずは、この「倫理」

から説明いたします。「倫理」とは何か？それは「人が正しく歩む道」であります。人を泣かすような行為をしてはいけない、人を欺いてもいけない、非社会的、非道徳的行為をしてはいけない、世のため人のために尽くしなさい。というのが倫理の教えであります。現代社会において、この言葉を理解しない人が非常に多くおられます。ロータリーにおいて、この言葉が一番重要な言葉なのです。

ロータリーの「職業奉仕は難解である。」とよく言われますが、ではいったい「何処が難解であるのか？」。私はこの部分から説明いたします。まずは、「職業奉仕とは何か？」を三つの問題点として整理いたしました。

第一の問題点

『職業奉仕と社会奉仕をどのように区別するのか』

ここで、非常に誤解を生む言葉を紹介いたします。それは、「自分の職業を通して、社会に奉仕をするのが職業奉仕である。」と考えられている方が非常に多くおられます。自分の職業を通そうと通さずとも、社会に奉仕するのでありますから、この奉仕活動は社会奉仕であります。では、この言葉の中に職業奉仕が含まれないのかというとそうではありません。だから誤解を生む言葉なのです。では、どのように区別するのか。それは、「奉仕に対しての受益者が誰であるのか」で区別することができます。

奉仕活動によって受益者が自分以外の地域の人々、地域社会である場合は社会奉仕であります。それと反対に奉仕活動で受益者が自分自身である場合が職業奉仕であります。

奉仕活動による「受益者」というのが解りにくいので実例をもって説明いたします。

私の泉南RCで動物病院を経営される尾崎史佳会員と山本昇三会員の両名は、「わんわんパトロール隊」という奉仕活動を行いました。これは日常の犬の散

歩で防犯活動をするという活動で、飼い主に腕章を、犬にはタッグを付けて散歩することにより、地域の犯罪を未然に防ごうという狙いがあります。この奉仕活動で「受益者が誰であるか」であります。青少年を犯罪や事故から守り、日常何気ない行動が防犯に役立つこの奉仕活動の受益者は、地域の人々であり、地域社会であります。この意味からこの奉仕活動は「社会奉仕」であります。では、この奉仕活動で受益者が自分自身となるのは何処にあるのでしょうか。それは、この奉仕活動をする人々（わんわんパトロール隊員）、そして地域住民が尾崎、山本会員にどのような感情を持つのかであります。私は、この方々が両名に対して「尊敬と信頼、信用」を持つことを確信しております。今まで、※狂犬病の予防接種（これは隊員になるための条件）をしていなかった人が、この奉仕活動に賛同し、病院を訪れ犬に予防接種をして隊員になった事例が多数合ったことを聞いております。つまり、両会員はこの奉仕活動によって地域住民から尊敬と信頼、信用を得て、その見返りとして自分たちの職業が繁栄するのであります。この意味からして、受益者が自分となり、この奉仕活動は「職業奉仕」となります。以上のように「社会奉仕」と「職業奉仕」は“表裏一体”のものと考えていただきたい。今、わんわんパトロール隊員は２００名以上登録され、新聞紙上でも取り上げられております。この事例からして、ロータリー第二モットー“He Profits Most Who Serves Best.”「最もよく奉仕するもの、最も多く報いられる。」（アーサー・F・シェルドン）の意味は、奉仕活動をすればする程、地域の人々から自分の職業に対して尊敬と信頼、信用をより多く得て、自分の職業がさらに繁栄するのであります。この「わんわんパトロール隊」の実践例において、尾崎、山本両会員はお金を儲けようと思ってこの奉仕活動をしたのではなく、地域の防犯と狂犬病の予防接種率を上げるためにこの奉仕活動を実践したのであります。そして、その奉仕の見返りとして報酬を得るというのが職業奉仕としての社会奉仕への考え方であります。

※(狂犬病の予防接種は国が定めるものでありますが、摂取率は約５０パーセントであると言われております)

第二の問題点

『ロータリーのＩserve とは何か』

まず職業奉仕という言葉から説明させていただきます。「職業」とはお金を儲けるための手段であります。私たちが生活を営むための利益を得る手段であって、これは“自分自身のためのもの”であります。「奉仕」とは世のため人のためのものであって、自分以外の“人のためのもの”であります。このように全く正反対の力の言葉が一つになって『職業奉仕』という言葉になっているため非常に解りにくいのであります。この言葉は完全なるロータリー用語であって辞書には載っておりません。そして『職業奉仕』という言葉は、「職業」即ちお金を儲けることであり、「奉仕」即ち世のため人のために尽くすことであります。つまり、職業奉仕とは「職業を営むことが、世のため人のための奉仕となる。」と言っております。ここが職業奉仕の一番難解な点であります。
深川理論では、この点が解らなくては「職業奉仕は永遠の謎となってしまう。」と言っております。

そこで、この問題をどのように説明するのかであります。深川理論では職業を営む心（お金を儲ける心）も奉仕の心（世のため人のために尽くす心）も「ひとつの心」として考えなさい。そして、この「ひとつの心」とは即ち、**『世のため人のために奉仕をする心を持って職業を営むべし』**と説いております。そしてこの言葉の意味は、「人を泣かすような金儲けをしてはいけない、人を欺いて金儲けをしてもいけない。非道徳的、非社会的な行為をして金儲けをしてはいけない。世のため人のためになるような職業を営まなければならない」。と説いております。この言葉は自分の職業に対して強く「倫理性」を要求しているのであります。職業奉仕とは、職業倫理を追求する運動であります。ここが、私が最初に言いました「ロータリー運動は倫理運動である」という言葉の意味であります。即ちロータリー運動とは職業倫理を追及する運動であり、そして職業倫理はロータリー思想の基本的な考え方であり哲学でもあるのです。

ここで視点を変えてこの問題を考えてみましょう。それはロータリー以外の諸団体との比較であります。ロータリー以外の諸団体の考え方は、「自分の職業で儲けたお金の一部を奉仕に使ってください、自分の職業時間の一部、もしくは余暇を使ってボランティア活動をしてください」という考え方で、これは困っている人々を助けるという意味合いがあり、「弱者救済を持って奉仕とする」という思想であります。そして、彼等は「職業の心」と「奉仕の心」は相反する心であり、職業が同時に奉仕とは考えられず、それぞれは別々の世界に存在するものであり、そのため彼等の行動から職業を排除し、奉仕の心のみを選択しております。彼等の標語は「 We serve」であります。

しかし、ロータリーは奉仕の基礎を職業倫理においております。職業の心（お金儲けの心）も奉仕の心（世のため人のために尽くす心）も一つの心であると考えます。そのため一つの心を持って職業を営み且つ奉仕するのであります。ですから、ロータリーにおいて倫理に反する儲けは存在しない。もし、人を欺き、泣かせたお金が奉仕に使われていたとしたら、果たしてそれは真の奉仕と言えるであろうか。もし、人を泣かせ、欺いた人間が平気な顔をしてボランティア活動をしていたら、それは偽善者であります。

ロータリーの標語は「I serve」であります。ロータリーの奉仕とは、個人の職業倫理に基づいて奉仕の心を職業社会に実践するものであります。倫理を学び、人間の人格を高揚させ、それを持って初めて職業社会に、そして社会的弱者に対して奉仕ができるのであります。ロータリーの第一義はロータリアンの心の開発であります。ロータリーは単なる慈善団体、単なる寄付団体、単なるボランティア団体ではないと言われるところがここにあります。ロータリークラブに入会が推薦されたとき、会員全員にそれを問う投票がおこなわれます。誰かが拒否すれば、その方は入会を許されない。これは入会に際してまでもロータリーはその人物の倫理を問うているのであります。

ここで一つの疑問が生まれてまいります。それは、「ロータリーはI serve だと言っているが、奉仕活動はクラブが主体となっておこなっているのではないか。ロータリアンはクラブの指示に基づいて活動をしている。これは団体奉仕

であってI serveとは言えないのでないか。」という考えを持たれている方が多くおられます。この考えは間違いであります。私は「奉仕は個人の職業倫理に基づいて、奉仕の心を職業社会にそして一般社会に実践するものである。」と言いました。ロータリークラブとはロータリアンの集合体であり、奉仕の機会をロータリアンに与えるだけのものであります。職業を持っているのはロータリアン個人ですから職業奉仕の実践ができるのであって、職業を持たないロータリークラブが如何にして職業奉仕の実践ができるのかであります。故に、クラブとしての職業奉仕の実践機能は無く、団体奉仕という概念は無いのであります。ロータリーは個人の奉仕理念にもとづいて奉仕活動を行います。他の団体と同じ奉仕活動をしていても内容は同じでも、中身の考え方が違うのであります。しかし、奉仕活動の実践は個人で行うのが原則ではありますが、サンプルとしての団体例をクラブで示さなければなりません。これを誤解されている方が多いように思えます。

“He Profits Most Who Serves Best”この言葉の意味するものは、「最も多く奉仕する者には、最も多くの利益がある」であり、深川理論では「奉仕に徹する者には、最大の利益がある。」と書かれております。職業倫理に徹することにより、事業の発展があり、利益を得るのであります。但し、ロータリーは儲けた金額を問題にするのではありません。儲けた方法を問題にするのであります。あくどい儲け方をして顧客を不幸にしてはならない。自分も儲かって幸せになるが、顧客も信用のある商人から商品を買って幸せになる。この両者の調和点が何処かになければなりません。深川理論では、これを抽象的な表現で**「利己と利他との調和」**という言葉で表現されております。職業倫理に徹することにより、商人と顧客とが互いに信頼と信用とで結ばれ、その結果、信頼と信用のある商人（ロータリアン）が栄え、その反射的効果として地域社会全体もまた栄えるというのがロータリーの“奉仕”であり、目的でもあるのです。

私たちは、品物や技術を通じて社会に奉仕をするために職業を営んでいるという心を持ち、その見返りとして利益を得るのであります。報酬を得るために職業を営むのではなく、職業を通じて社会に奉仕をしたから報酬を得るのだと

いう心を持たなければなりません。つまり『世のため人のために奉仕をする心を持って職業を営むべし。』という言葉の意味がこれであります。

ここで“職業奉仕の危機”が姿を現します。

職業奉仕の考え方は、問題点１、２、で示したように、集団で倫理を学び、人間の人格を高揚させ、奉仕の理想を勉強する。そして、職業倫理の追求によって正しく利益を得て、個人的に奉仕すべきであると主張いたします。しかし、これに対して、人道的活動を中心と考える人たちは、弱者に涙し、人のために働こう、困っている人達に救いの手をさしのべよう、そして口先だけの活動ではなく、「金銭的、物質的援助活動」が必要である、と主張いたします。つまり、「弱者救済をもって奉仕とする」という考えであります。このようにロータリーには二つの考え方が古来よりあります。この二つの異なった意見を調和するために**「決議２３－３４」**が生まれ、第一条で、奉仕哲学である**“Service above self”**と実践理論の原理である**“He Profits Most Who Serves Best”**がロータリーにおける「２つのモットー」として明記されました。このようにロータリーの思想は決して一枚岩ではなく、いろいろな思想が入り乱れて現在に至っております。しかし、ロータリーはお互いの思想を排除することなく、互いに学びあいながら、いつも「寛容の精神」を持って、自分とは異なる思想の存在を認め学びあってまいりました。しかし、近年、職業奉仕理念の衰退により１９８４年頃より決議２３－３４を排除しようとする動きが顕著となり、１９８８年の規定審議会では、それまで同格であった職業奉仕の実践原理である“He Profits Most Who Serves Best”の標語が格下げされて“Service above self”の下の第二標語となっております。

ロータリーの奉仕理念の根底をなすものは職業奉仕理念である“He Profits Most Who Serves Best”であります。“Service above self”はその応用問題的要素であります。しかし、職業奉仕理念が忘れられ、“Service above self”のみが一人歩きしているように思えます。社会奉仕や国際奉仕はインパクトの強い活動であり、発展性や意外性もあり非常に面白い活動であります。しかしロータリーの基本理念を忘れた活動は、他団体と何ら変わりのない活動となり、

ロータリー活動の衰退を意味すると思われます。まさしく「職業奉仕の危機」であります。

第三の問題点

『例会出席と職業奉仕実践の問題』

ロータリー活動において、毎週一回の例会に出席し、食事をし、卓話を聞いて、寄付をして帰る。そのような無駄な時間をついやすより、ボランティア活動をするほうがはるかに世のため人のためになるのではないか。という考えを持たれる方が増えてきております。何故、ロータリアンは毎週一回の例会に出席しなければならないのでしょうか。それは、有益な職業人の中から選ばれた会員が、毎週一回の例会に集り、お互いが先生となり生徒となって、集団で奉仕の心を学び、自己研鑽し、その心をそれぞれの家庭生活、職業社会、地域社会、国際社会で奉仕の心を実践するのであります。まず、ロータリアン自身の心を磨かなければ、倫理を学ばなければ、世の中に倫理を提唱することができないのであります。単なる寄付だけを目的とする団体であるならば、毎週例会を開く必要はなく、お金だけを出しておけばいいのであります。社会奉仕をしたければ、それを専門にしている星の数ほどある団体に入ればいいのであって、ロータリーに入った意義がありません。そして、例会においては、それぞれが平等であるという大原則があります。すべてのロータリアンが対等の地位に立って、お互い学びあうのであります。これを**「均一的平等の原則」**と言います。

毎週一回の例会に出席し、卓話を聞き、そして自らが卓話者として話をし、異業種の良質な人たちとの接触を通じてロータリアン自らが心を磨き、そして今まで以上の知識と知恵を持ち、自分の職業社会で「世のため、人のためになる仕事」を目指すのが職業奉仕の実践であります。即ち、「職業奉仕の実践」は、毎週一回の例会出席から始まるのであります。米山梅吉氏は「例会は人生の道場である。」と言っております。

ここで「職業奉仕の危機」がまたしても姿を現します。

私がロータリーに入会を許された時、最初に言われた言葉が「出席」であります。「出席はロータリアンの義務である」（その他の義務は、ロータリーの友の購読、会費の納入）と言われ、少しでも休むと先輩ロータリアンから厳しくお小言を頂戴いたしました。ところが今はどうでしょう。100%出席のクラブはほとんど無く、長期欠席のロータリアンがどのクラブにもいると聞いております。色々な理由が考えられますが、一番の原因はロータリアンがロータリーに魅力を感じなくなってきているのが一番の原因ではないでしょうか。まさしく「職業奉仕の危機」であります。他団体に無い特色が職業奉仕ならば、それをロータリアンに知らしめるのがクラブの職業奉仕委員長であり、その委員長を育むのが地区役員の使命ではないかと考えております。

以上が私の「職業奉仕とは何か」（職業奉仕の危機）であります。今、RI から CLP が提示され、各クラブでは実施するかどうか盛んに議論されていると思われます。四大奉仕部門の一つである職業奉仕が、奉仕プロジェクトの小委員会として規定されていることに関して、私は文句を言う立場の人間ではありません。もし、職業奉仕の理念がロータリアン全てに周知され、理解されているならば当委員会が無くなってもかまわないと、私は思っております。しかし、今、どれだけのロータリアンがこの考えを理解しているでしょうか。“He Profits Most Who Serves Best”「最もよく奉仕する者、最も多く報われる。」この言葉は職業奉仕における実践原理であり、金銭的利益を上げる方法として職業奉仕の重要性を説いております。「小さな serves をすれば、小さな利益しか得られないが、大きな serves をすれば大きな profits 利益が得られる」。ではこの「serves」とは如何なるものであるのか。それは、利己と利他の調和によって顧客との信頼関係を結び、品物や技術を通じて社会に serves することであり、そのためには「アフターサービスの原則」「誇大広告禁止の原則」「適正価格厳守の原則」等の各論があります。そして profits 利益とは一時的利益ではなく、継続的な利益を意味し、社会に serves した見返りとして profits を得

ているのであります。これが本来の職業奉仕の考え方であります。

しかし、21 世紀に入り産業構造は大きく変化しております。IT 化時代の到来によって、コンピューター一台あれば発注から販売、決済まで全て済む時代であり、インターネットを使えば世界で一番安い品物を即座に購入することができます。ポール・ハリスやシェルドンがいた時代には考えられない程、世界がボーダーレス化され産業構造が大きく変わってきております。当然、職業奉仕も時代に合わせ変化しなければならないと思われます。“He Profits Most Who Serves Best”は事業を発展させるための原理原則でありますから、これに即し、そして時代に合った実践方法や実践例を構築しなければなりません。これができなければ、まさしく「職業奉仕の危機」となっていくのではないでしょうか。